

## Hの人生（補）

早川博信

もう二年ほど前になる。「Hの人生」と題する駄文を書いた。書き出しには「今まで何をしてきたのか、どんなことがあったのか、そのときどんなことを思ったのか、そんなことを時間の順ではなく、短いエッセイのタイトルをあいいうえお順に並べた形で書いてみたい」とある。それなのに、「あ」行は「当たった」で、以下「か」行の「下宿」から九個の短文が並んでいる。

- 一. 「あ」、当たった
- 二. 「げ」、下宿
- 三. 「ご」、五右衛門風呂
- 四. 「と」、東西冷戦構造崩壊の前後
- 五. 「と」、登山靴
- 六. 「な」、名田庄多聞の会
- 七. 「な」、何かしなければ
- 八. 「ふ」、福島原発事故と311の会
- 九. 「や」、山
- 十. 最後に

上記のリストを見ただけで、思いつくままに書いたのがよく分か

る。今回は（補）と言うことで、最初から「あ」行から「は」行まで一  
つずつ選び出し、それについて書く。

- あ行↓「一. ウイスキー」  
か行↓「二. 県営住宅」  
さ行↓「三. スッコダランチヤ」  
た行↓「四. 台風十三号」  
な行↓「五. 難聴」  
は行↓「六. 飛行機」

「H」の人生」なのだから、話はほとんどが昔話になるだろう。あんなこともあった、こんなこともあったと。そんなことを書きたいのだから仕方ない。

### 一. ウイスキー

中学一年生の冬に父親が亡くなった。昭和三十三年の一月である。このときから、あまり豊でない生活が始まった。食べるものがないのでひもじいというようなことはなかったが、高校から奨学金をもらうような、そんな生活である。

大学に入ってそこでも特別奨学金(月八千円、そのうち三千円だけ返還すれば良かった)をもらい、家庭教師のアルバイトをして学校に通っていた。当然、酒など、だれかにくっついて行かなければ飲めなかった。良く覚えていないが、ほとんど飲まなかったのではないか。金

沢大学の化学科だったが、専門課程に入るときに選んだのが分析化学だった。どの講座も特に行きたい、勉強したいことはなかったが、木羽敏泰先生の分析化学教室だけは、船に乗って外洋にでて水を汲んでと、野外活動があるのを知って、そこを選んだ。木羽先生からはいろんなことを教えてもらったが、それらは割愛。先生は二〇一七年二月二十日に百三歳で亡くなられた。八十歳を越えてから奥さんを亡くされ、その後は百歳近くまで一人で生活されて、我が家から野菜など送ると「早川君、エンドウご飯はどうやって作るのだったかな」などと電話で話されていました。

木羽研究室の恒例は卒業式の前日先生のご自宅でごちそうをいただくことで、研究室の職員、学生がそろって先生の家に押しかけるのである。その日は研究室でも簡単な「飲み会」があり、たしかビーカーでいっぱいやったのでなかったか。研究室から先生の家に伺うため、三階の研究室から理学部玄関に下りると、すでに先に下りられていた木羽先生が長靴で雪の上を小刻みに行ったたり来たりされていて、それが雪面に「早川」と出てきてとても感激したのをはつきりと覚えてる。

木羽先生のおうちで初めて「ダルマ」を飲んだ。これが最初のウイスキーです。あまりにおいしくてそのことを口にする、先生は「そうか、旨いか、酒飲みだな」と、褒めてもらったのか、どうか。「ウイスキーを薄めて飲む奴がいるが、せっかく濃くしてあるのをもっと濃くしてある、など、やはりこれは分析化学的だ」と思った。あまりに旨かったので飲み過ぎ、下宿に帰るのに路面電

車を下りて道を歩くのだけれど、どうしてもまっすぐに歩けず、文字通り千鳥足であっちに行ったりこっちに行ったり、それでも翌朝目が覚めるとちゃんと洋服がハンガーに掛けてあった。翌日の卒業式ではずつと頭が痛かった。

名古屋の大学院に行ったのは、これも学部の選択とあまり変わらず、何かを勉強したいというより、世間に出たくない、野外で何かして遊んでいたいという思いがほとんどで、野外の研究が主である水研を選んだ。二年間環境試料の測定ばかりしていてこれもいやになり、家に帰らなければというのもあって福井県の教員試験を受けたら、最低ランクのC評価で、これでは就職にはほど遠く仕方ないから一年間は何もせずいるかと、貧乏を顧みず考えていたら、あいつはどこにも行けずにいると、どこからか木羽先生の耳に入ったように、それなら福井県では来年(昭和四十五年)稼働する原子力発電所の事前調査のために職員を募集しているのでそこに行ったらどうか、と言われ、それなら行くか、という感じで就職が決まった。横柄にも「行ってやるか」という気分がいつまでもあり、それが辞めるまでどこかに残っていた。

就職した福井県衛生研究所は放射能担当がHと上司のK川さんの二人。その他、病理関係(ウイルスと細菌)、環境衛生関係(いわゆる公害から衛生一般)などあって、衛生一般を担当していた一人にK谷さんがいた。

K谷さんは、Hが非密封の放射線源を取り扱うときに必要になる「第1種放射線取扱主任者」試験を受けなければならないことを知

って(この免許は職業上必要な資格であった)、もし一発で合格したら我が家でごちそうをするよ、と言ってくれた。当時の合格率は二十%以下だったので多分受からないと思っていたのか、あるいは合格できるよう励ましてくれたのか。当時はそれほど忙しくなかったので仕事の合間に受験勉強をしていた。試験は近畿大学の階段教室で二日にわたってあった。初日が終わり、二日目の試験場に出てきた受験生は半分くらいだった。Hはともかく合格して、昭和四十六年十一月、免許状が届いた。K谷さんは喜んでくれ、約束通りごちそうをしてくれた。その後もう一度飲もうと、福井の繁華街の片町で祝杯を挙げたとき、バーというのかスナックというのかよく分からないが、地下に下りて行ったところにその店があった。どうやら行きつけの店のようで、そこで「カティースーク」をいただいた。細長い薄い緑色の瓶に帆船の絵が張ってあった。これもとてもおいしかった。「おいしいわ」と言うと、K谷さんは「スコッチだよ」と言った。スコッチなる語をその時初めて聞いた。「カティースーク」が十九世紀に中国からイギリスに紅茶を運んでいた帆船の名前であることを教えてくれたのは、その店のママであったのかK谷さんであったのか、もう定かでない。

いまは、ダルマもカティースークも買おうと思えば買えるので、カティースークを飲むこともあるが、あの頃ほどおいしいとは思わない。

## 二、県営住宅

昭和四十九年一月に結婚して県営住宅に住むことになった。福井市の北、森田に木造平屋建ての住宅があった。上の娘が小学校に上がるまでの八年間ここにいた。(田舎に帰らなければと思っていたので、帰るのは娘の小学校入学が一つの区切りだと考えていた。従って、子ども達四人すべて名田庄小学校から学校生活が始まった)

県営住宅に住むことにしたのは家賃が安かったからである。入居資格に年収の制限があり、もちろんそれは軽くパス、月三千円の家賃であった。当時、ショートホープを一ヶ月に一箱ずついて、その費用がちょうど三千円だったので、これはたばこの止め時だと思い、禁煙には何もしないときがいいと聞いていたので、結婚する年の正月の三日間に実行した。何とか止められたが、そのときのつらかったこと。目がちらつき、頭がぼーっとし、落ち着きがなく、全体的に焦点が定まらなかった。ニコチンを早く身体から出すために、せつと水を飲んで正月を過ごした。

初めてその住宅を見に行ったときはショックを受けた。玄関を開けたら腐ったような畳が斜めに何畳も立ってかけてあった。ああ、こんなところに住むのかと情けなかった。しかし、次に行ったとき、二部屋しかない小さな家には新しい畳が敷かれており、襖もきれいだった。これなら大丈夫と安心した。

二軒がくっついた住宅は、正確に左右対象形で、間取りも全く一緒だった。こちらの玄関を左端とすると向こうの玄関は右端になる。向こうの家と薄い板で仕切られた押し入れが一番奥に、ちょうど背中合わせのような形であった。隣の家のテレビの音が異常に大きく、

帰宅して玄関を入り、テレビの音が大きいので妻に「ちょっとテレビの音、大きいのでないの」というと、「お隣さん!」。それくらい大きかった。それが夜になっても続くときは、押し入れの奥に向かつてHは「うるさい!」と怒鳴った。それでも止まないときは、外に出て(夜です)隣の家の窓ガラスをノックして「やかましい」と叫んだ。そんなだったのに、特にお隣と剣呑な関係にあったかというところほどでもなく、子ども達は毎日のように我が家に遊びに来ていた。親同士も普通の状態で付き合っていた。

住宅の前と後にスペースがあり、玄関から見て右側の道路に面したところは比較的広く、妻はそこに砂を入れて(知り合いに頼んで二トンダンプで砂を入れてもらった)、子ども達の遊び場にしていった。窓が低く家の中で仕事をしていても子ども達が遊ぶのを見ていられた、と言っていた。押し入れ越しに「うるさい!」と叫んだ隣の家の子ども、うちの子と同じくらい歳のだったので遊びに来ていた。もう一方の裏の軒下のスペースに、山岳会の仲間の一人に大工がいたので、その人に風呂場を作ってもらった。「おまえの仕事はこの板を止めることだ」などと言われ、なれない釘打ちをして右腕がポンポンになりしばらく痛くて動かせなかった。台所の大型の瞬間湯沸かし器からお湯を引いた。大工仕事のようなことをしたのは後にも先にもこの時だけだったが、家族のために風呂場を作ったと、少し誇らしかった。

昭和五十五年の十二月に長男が生まれた。三人目の子どもであった。この年は大雪でのちに五六豪雪と呼ばれることになるのだが、

いつもなら出産後は妻の実家のある武生の家で親子共々見ってもらうのだが、異常な大雪で福井市内の病院から武生まで車で行けず、大量の雪が圧雪された国道はスキーのモーグル競技場の雪面状態でそこをガタガタ跳ね上がりながら、なんとか森田の県営住宅までたどり着いた。当時の勤務地は敦賀だったが、とても福井から通勤できる状態でなく、幸い若狭のほうは雪が少なかったため、Hは名田庄の家から敦賀に通った。一ヶ月くらいだったろうか、その間県営住宅は妻と長男の二人だけだった。Hは一週間に一度森田に戻り、屋根の雪を下ろし、おしめを洗い、汚水を、くみ取り式のトイレに捨てるという取りに来てくれるのか分からない状況だったので、夜そつと外の排水路に捨てに行った。

一番上の娘が小学校に入るとき、一家で名田庄に帰った。昭和五十七年の四月であった。県営住宅に居たのは八年間ほどであった。

### 三. スッコダランチャ

イタリア語で「オレンジのジュース」の意味。

「ウイスキー」のところで書いたように、就職はしたがいわゆる賃金労働者の意識はなく、なにか研究まがいのようなことをして過ごしていた。もっともそれらも原発周辺の放射能調査の一環であったので、百パーセント税金泥棒というわけでもなかった。数年に一度は外国で研究発表しようとして決めて、その最初が一九八二年マレーシアのペナンで開催された International Symposium on Radiation Physics だった。Radiation Physics の学会だったが環境のセッショ

ンもあり、「原発周辺の放射線測定」のテーマで参加することができた。一九八二年二十五日から二十九日までだった。Hの休暇は五月二十三日から六月五日まで。正確に言うとは休んだのではなく、職専免の制度を利用した。これは出張旅費は出ないが、この間は専ら職に就くことを免除するという制度で、年次休暇とは別であった。

なぜペナンの学会に参加したのか。ちよつと脇道にそれを書いておきたい。

ペナンにあるマレーシア理工科大学 (USM) ーここがシンポジウムの会場だったーの職員で IAEA (国際原子力機関) の短期研修で金沢大学に来ていた Hu 氏がたまたまHの職場に見学に来て、いろいろ話しているうちに、ペナンで国際学会が開かれるから来ればいい、うちに泊まれば良いし、などとトントン拍子にことが進み参加した次第である。このときもいろいろ思い出すに懐かしいことが一杯あるが割愛。

その次の International Symposium on Radiation Physics の開催地がイタリアのフェラーラでも参加した。

旅費はすべて自分で捻出していたので(職場からもらわなかったという意味。妻のおかげである、本当に)、飛行機も安いのを探し南回りのパキスタン航空 (PIA) にした。成田からまずパキスタンのカラチ、そのあとカタールのドーハ。乗って気がついたのだがパキスタンはムスリムの国で飛行機にアルコール類は一切積んでいなかった。途中給油や何やらでしばらく止まっている間に空港内の売店に走ってビールを飲んだ。ドーハは砂漠のまったただ中であって上か

ら見ると空港の周りはずべて砂漠だった。水は鉄道で運んでいると聞いた。今はどうなっているのか。ここから飛行機を飛ばして、そして着陸もさせるのだという人間の強い意志を感じた。ドーハからローマへ。記憶では日本から丸一日ほどかけて着いたように思う。ローマから鉄道に乗ってフェラーラに行く。フェラーラはミラノと同じくらいの緯度にある北イタリアの小都市である。

小さな町だったので (二〇一七年時点で十三万人) 地図を頼りに予約してあったホテルを探した。出てくる前、学会参加の申込書にホテルのグレードがあり一番下のクラスに丸をつけて提出してあった。着いたホテルのフロントにはお腹が出っ張ったおじさんがいて英語は全く通じなかった。そこが一つ星であること、部屋にはトイレもシャワーもないことを身体言語で知った。ちよつとびっくりした様子を示すと、「変わる？」というような意味のことをおじさんが言ったように思ったが、泊めてもらいます、とこれも手真似で返事する。

ホテルで食事ができないので夜になると薄暗い道を歩いてレストランに行った。これもはじめ見つけるのにしばらく時間がかかったが、見つければそこが毎晩行くところになった。そこで最初に覚えたのが「スツコダランチャ」だった。指さして注文して「これなんと言うの」と身体言語で訊ね、教えてもらった。「スツコダランチャ」の次が「ヴィーノヴィヤンコ」(白ワイン) だった。この二つで夕食が豊になった。主食はお任せで毎晩適当に出されたものを食べていた。ヴィーノヴィヤンコは持ち手の付いた五百ミリリットルのガラ

ス容器に入って出てきた。たいていもう一杯飲んでいた。毎晩、一リットルの白ワインであった。この店からホテルに帰る道筋にそれほど広くはない町の広場があり、その中心に小さい教会が建っていた。男衆が集まって何やらおしゃべりに興じていた。知った仲間と外でしゃべる習慣のようであらやましかった。日本ではどこか店の中で酔っ払って世間話ばかりでないか！、そんな風感じてイタリアの夜がうらやましかったのである。

学会の会場までは毎日歩いて通った。研究発表はポスター発表であまり質問者(つまり興味を示す人)はいなかったが、そんなことはどうでも良かった。学会は五日ほどあったのか。ホテル↓会場↓夕食レストランの繰り返しの日だったが、開催中に地元のフェラーラ市交響楽団の演奏会があり、学会参加者が招かれた。会場は立派な大聖堂のようなところだった。階段の踊り場に「かつてこの地でコペルニコスが学んだ」と銘板がはめ込まれていた。演奏は夜も更けてから始まり終わったのは零時を回っていた。

一つ星のホテルを出払うとき、宿のおじさんがまだ宿泊代をもらっていないという。こちらは、学会の参加申し込みと同時に振り込んであったので、払ったよと言った。しかし、これは、共通の言語がなかったのだから、まともな会話で意思の疎通ができたのではなく、本当のところどうして通じたか分からないが、ともかく互いの言いたいことは通じた。そういう状況であることだけは理解できた。その先がまた不思議なのだが、突然、おじさんがホテルの近くに旅行代理店があり、そこに聞けばおまえが支払い済みかどうか分かる、

というようなことを言い、そこで確認するからと、待っていると、OKだ、振り込んであったよと、これまた非言語的に互いに理解でき無事ホテルを出ることができた。

旅行メモを見ると、このとき休んだのは一九八五年九月二十六日から十月十三日までの十八日間である。良く許可してもらったものだと思ふ。学会が終わったあと、ヴェネチア、フィレンツェ、ローマと回り、マレーシアの学会で知り合ったドイツ人のお宅にお邪魔して帰国した。帰りの便はパキスタンのイスラマバードから北京経由だった。途中ヒマラヤの上を飛んだ。機長からアナウンスが入り、少し下降してヒマラヤ山脈をお見せしますと、機は機首を下げ、乗客は縦に長く刻まれたヒマラヤヒダを窓越しにすぐ近く感じて見ることができた。あんなサービスができたのだな、時代なのか。スッコダランチャ、ヴィーノヴィヤンコと唱えると当時のことが鮮明によみがえる。

#### 四、台風十三号

昭和二十八年九月二十五日、紀伊半島に上陸した台風十三号は日本を縦断して宮城県から太平洋に抜けた。Hの住む名田庄は台風の西側に当たっていた。我が家に来られた方はご存じのように家の前に高い道がある。台風以前にはこのような高い道はなく、座敷から庭を通して川とその向かい側が見通せたのである。

このとき、小学三年生。父は小浜に勤めていたので家にはいず、祖母も親戚のところに行っていて我が家は母とHの二人きりであった。

雨の勢いはすごかった。川水はどんどん増水していた。当時、数十メートルの長さの木製の橋には二ないし三個の橋桁があり、川から橋を支えていた。そこに流木が流れていて引っかかり一時的に木製ダム状態になり、水がたまり、それが橋もろとも流されると一気に増水し、家の中の水位はあつという間に高くなった。早く逃げろと、今では良く覚えていないが、一人で逃げたのか誰かに手を惹かれていたのか、母はまだ家の中にいたので、ともかく水の着かない集落の上のところにあつた親戚に逃げた。母はあとで助けに来てくれた親戚の人と腰までの水の中を、きつい流れがあつたと思うが、逃げてきた。

薄暗くなり、水が来る心配のない親戚の家から我が家を見ると母屋の屋根の下まで水が来ていた。帽子だけが出ているような姿だった。川向こうの田んぼ・畑は一面水が広がり海のようにあつた。

畳や家具は台の上に乗せて水が着かないようにしてあつたが、翌日家に帰ると、台になる部分が足払いを食らい、その上の畳や家具はそのまま持つて行かれてしまつていた。初めてのことで積んでおけば水が届かないと思つていたが下が崩れたらひとたまりもないのを終つてから知つた。家は屋根と柱だけ、向こうが見通せた。水は鴨居まで来ていて泥がその半分の高さ、床上ギリギリまで詰まつていた。

名田庄村史を見ると、死者行方不明者が出たとあるがその人数は書かれていない。家毎流されて亡くなった方がいたのは間違いないのだけれど、当時の正確な記録は残つていない。また雨量について

も村内(その当時はまだ名田庄村ではなくそれ以前の合併前の知三村)の記録はなく、五キロほど離れた中名田地区でところで七百ミリほど降つたとある。

今のようにボランティアなどまつたく、親戚の人が泥出しと後始末を手伝つてくれた。自衛隊ができたのが一九五四年(昭和二十九年)で、その前年の昭和二十八年は警察予備隊から改組された保安隊であつた。もちろんこんなことは当時の小学三年生は知るよしもなく、なにか兵隊さんみたいな人が助けに来たと思つて見ていた。家財道具一切が流され家の中は床まで泥だらけなので、被災後住んでいたのは母屋のすぐ前のぼろい小屋(物置兼作業小屋のような建物)の二階だつた。祖母が毎日炊き出しの食事をもらいに行つていた。Hはそのぼろい小屋の二階の窓から顔を出して「今日のおかずはなに！」と叫んでいた。その中にコンビーフの缶詰があつた。上に萎んだ台形の缶詰の下の方に小さな出っ張りがあり、そこに鍵状の缶巻き取り小道具を差し込んで順に巻き上げていくと中身のコンビーフが台形の形のまま出てくる。細い赤い筋が入つた肉が現れる。そのうまかつたこと、忘れられない。

当時父は小浜で働いていて田舎をそれほど好んでいなかったみたいで(Hはうすうす感じていた)、台風により家がほとんど壊滅状態になりこれを機会にもう小浜に出ようと言つたらしいが、Hが嫌と言ひ張つたので実現しなかつたとあとで聞いた。そんなことがあつたのは全く記憶にない。どうして嫌と言つたのか。不思議な気がする。中学校を卒業し高校に入ると一目散と言つた感じで小浜で下宿

を始めてそれがどれほど開放的で嬉しかったかは、すでに書いた。あるとき出ていたらどうなっていたのか。

## 五・難聴

二〇一九年の秋、畑で収穫したサツマイモの後始末をしていたら、H田さんが通りかかり世間話になった。Hが、この頃耳が聞こえなくて、補聴器を付けようかどうか迷っているの、などと言うと、俺は耳が治ったぞ、医者を変えて診てもらえばいい、あそこは良い、補聴器を付けるなど降参しているみたいなものではないか、とけしかけるので、その治ったという個人医院の耳鼻科を教えてもらって診てもらいに行った。

診察時にどうしたのですかと訊かれ、H田さんからここに来ると聞こえない耳が治ると聞いたので来ましたと答えた。先生はそうですかと、ちよつと困ったような嬉しいような妙な顔をしていた。詳細な検査があり（これまで小浜病院の耳鼻科でしていた検査プラス別のあったがそれは忘れた）、その結果を見て診断が下った。

「あなたの難聴は治らない難聴です。難聴には治ると治らないのとあります。治らないのは聞く神経がやられているので、加齢によるものですが、そのような場合は治りません」

何のことはない、これまでの診察と同じではないか。しかし、そのあとの先生の言葉が効いた。

「いい加減に返事して済みますか、しっかり聞いて対応するか、そ

れはあなたが決めることです。それが補聴器を付けるかどうかを決めることになりすね」

しっかり聞いてそして返事したい、これは買わなければと思った。決心である。紹介してもらったリオネット補聴器センターへすぐに向かった。二〇一九年十一月十八日のことである。

店で再び聴力の検査。ここでの検査は病院での周波数毎の聴力検査に加え、普通の言葉が聞こえるかどうかの検査もあった。一つの音は音として聞こえてなくても、言葉の場合、聞こえなかった音を補って理解しているようで、「あ」行から「わ」行まで、どの音が特に聞こえにくいかわかる検査らしかった。それらを総合的に判断して、機器の値段も当然考慮に入れて、これくらいですかと言われたのが片耳十万ほどの補聴器であった。

両耳に入れてしばらく試すことになった。帰り間際、店の人は、車のウインカーの音やバックギヤーに入れたときの音がとてもうるさく聞こえると思います、そのうち慣れますから慣れるようにしてください、と説明してくれたが、まさにその通りだった。ウインカーはピコピコピコとバックギヤーはペケペケペケと本当に大きく聞こえる。仕方ない、慣れるしかないと覚悟した。

一ヶ月の試験期間を経てついに購入、まさに清水の舞台から飛び降りるほどの決心だったが、やはりそのときも先の耳鼻科のお医者さんの言葉があった。しっかり聞いて返答する、これでこれから先やっていくのだと。

少し慣れてきた今、補聴器を付けるとどうなるかという、写真

で例えると焦点のぼけた写真にピントが合ってはつきりする、そんな感じである。今、終日装着していないが、寄り合いなどあるときやテレビを見るときに付けている。全部完全に聞こえるわけではないが、以前のように会議で皆が笑っているときに放って置かれる様な状態からは脱することができた。正しい選択であった。

## 六・飛行機

小学校に上がる前か一年生になった頃と思う、家の裏の田んぼでだれかと遊んでいた。空を見上げると（音がしたに違いないが、それは覚えていない）、双胴の飛行機があった。記憶の中では空に止まっている。子どもでもそれは戦闘機であることは分かった。その飛行機がそれがそれ以来ずっと気になっていた。

ちょうどその頃父が飛行機の図鑑を買ってくれた。空に浮かぶ飛行機を見たのより、こっちの方が早かったのかもしれない。様々な飛行機が開発史の順に描かれていた。この本を飽きずに眺めていた。大好きな本のひとつであった。飛行機の本に加え、木の図鑑も買ってもらった。そこには、大きな木をくりぬいたトンネルの中を乗り合いバスが通過している絵があった。アメリカである、と書いてあった。父がなぜ飛行機の本と木の本を買ってくれたのか。この二冊だけが父から与えられた本として記憶にある。

二〇一三年四月から、息子が米国のオハイオ州デイトン(Dayton)で働くことになった。会社からの派遣で数年はいるらしい。オハイオ州に行ってみようと思いい、どこか面白いところはないかと調べる

と、「オハイオ州に来たのならまずはデイトンの国立アメリカ空軍博物館へ」などと書いてあり、息子の住んでいるところからそれほど遠くないところにそれがあるのを知った。ここにはこれまでアメリカで作られた飛行機がすべて、本物で展示されているという。

小学校に上がったのが昭和二十六年(一九五一年)で、朝鮮戦争は一九五〇年六月二十五日に勃発し一九五三年七月二十七日に休戦協定が結ばれている。それで、「朝鮮戦争 双胴戦闘機」で検索したらF-82B ツイン・マスタングと出てきた。子どものとき見た双胴の戦闘機はこれであった。写真も載っていたが、記憶の飛行機と一致した。あのとき、写真の飛行機を下から眺めたのだ。また、ウィキペディア日本語版の国立アメリカ空軍博物館のページには、朝鮮戦争時の戦闘機一覧の中にF-82B ツイン・マスタングが挙がっていた。

もう一つの、大きな木をくりぬいたトンネルの中をバスが通過する方は、カリフォルニア州のセコイア国立公園にあることが分かった。ここには高さが百メートル近くで、胴回りが数十メートルのジャイアントセコイアがあり、倒れた木のひとつをくり貫いて車が通過している写真が出ていた。セコイア国立公園の近くにはヨセミテ国立公園もあり、これらは西海岸のサンフランシスコから車で行ける距離の所にあるので、息子と一緒に行かないかと頼むと良いよという返事だった。双胴の戦闘機と木のトンネルを抜けるバス、これらの実物を見る機会が生じたのである。六十数年も経過してのちに。二つの気に掛かっていたこと、それも幼い頃になくした父の思い出

と重なっていることが、回り回って今頃になり叶いそうだぞと思っ  
た。

二〇一四年十一月二十日、成田十六時五十分発でアメリカに向か  
う。ミネアポリスで国内線に乗り換えてデイトンへ行く。この乗り  
換えが大変だった。まず、空港内を大きな荷物を引きずって延々と  
歩いてトラム乗り場へ行く、次にトラムに乗ってどこかに連れて行  
かれ、今度は下りてから再び延々と歩いて入国検査場へ。ここで荷  
物を預けることができた。入国検査はあっという間に終わったが、  
実に巨大な空港であった。デイトンに着いたときはくたびれ果てて  
いた。息子達の家(伴侶のTちゃんと二人住まい)でシャワーを浴び  
ワインを飲んでなんとか元気になる。

翌二十一日は休憩、二十二日から一泊二日でバーボンウイスキー  
の工場見学小旅行に出た。Four Roses とMAKERS-MARKの二つ  
の醸造場を見学した。これらはケンタッキー州にあり、シンシナテ  
イーで泊まったが、このことは割愛。(極上のウイスキーを飲めまし  
たよ)

十一月二十四日、国立アメリカ空軍博物館見学。デイトンの中心  
地から北東に十三キロのところにあるライト・パターソン空軍基地  
に博物館はある。入場料は無料で、ほとんどの飛行機が屋内に収ま  
っていた。もちろん全部実物なので、収納庫の建屋は巨大である。中  
に入って圧倒される。ありとあらゆる飛行機が時代順に展示されて  
いる。ライト兄弟の飛行機創成期から始まって、戦争期間毎に(第一  
次世界大戦期、戦間期、第二次世界大戦期、朝鮮戦争期、冷戦期、ベ

トナム戦争期、冷戦後期、冷戦終結後)並べてある。ライト兄弟の複  
葉機ライトフライヤー号の複製が高い天井からぶら下がっている。  
家業は自転車屋であり、その当時の自転車もある。ライト兄弟は終  
生そのほとんどをデイトンで暮らしたと説明パネルにある。

飛行機の歴史はそのまま兵器の歴史である。プロペラがいかにかに工  
夫されてより効率の良い丈夫なものになっていったか、そこに備え  
る銃の位置等等など。第二次世界大戦期のところではB-29があっ  
た。原爆の模型があった。そこには原爆投下が戦争の終結を早めて  
犠牲者を少なくしたという、アメリカのこれまでの公式見解がパネ  
ルになっていた。

この期の展示には米国以外の国の戦闘機も並べてあった。イギリ  
ス、ドイツ、イタリア、それに日本。日本の戦闘機は、紫電改と零式  
艦上戦闘機と桜花。最後の桜花は体当たり専用自爆機である。母  
機につるされ敵に近づいて、発射され最初はロケットエンジン、そ  
の後は滑走で体当たりするという。展示されているのを見ると、模  
型のようなちやちやなものである。これに乗って突っ込んでいった若  
い兵士のところまでHの心は届かない。

見たかったF-82B ツイン・マスタングは朝鮮戦争期のところ  
にあった。子どもの時に家の裏の田んぼから見上げた飛行機はこれ  
だった。思いがたついていた割には印象はあつかなかつた。歴史の  
中のある時期、戦いに参じた、たくさんある戦闘機の一つとしてそ  
れはそこにあつた。

兵器としての飛行機は時代とともに大きくなっていく。不気味に

無機的につるんとしたものとして変化していくのがよく分かった。最後はスペースシャトルのところまで行き、外に出る。アメリカの家族連れが大勢、これから入る人も、もう出てきた人も、そこにはいた。

アメリカは広大な国である。初めて行ったのが一九九九年九月のユタ州ソルトレーク市で、そこから郊外に車で連れて行ってもらったとき、こんな広大な土地を一つの国が所有しても良いものなのか、と思った。現在、大陸だけで四つの標準時帯があり、東海岸と西海岸とは三時間の時差がある。日本とタイとで二時間の時差だからその広大さが知れようというものである。

三時間の時差のある、東の小都市デイトンから西の外れのサンフランシスコまで、ジャイアントセコイアを見に行く旅に出ることになった。

十一月二十七日、息子の家を早朝の四時半に出る。Tちゃんも一緒に、三人の小旅行である。

デイトンからまずシカゴまで飛ぶ。一列＋通路十二列の小さな飛行機だった。離陸前、翼になにかかけていたが、付着した氷が付いたのでそれを取るために十分ほど遅れるというアナウンスだったからきつとお湯をかけていたのだろう。一時間足らずでシカゴに着いた。機内からまだ夜の明けないシカゴの町が見えた。乗り換えてサンフランシスコまで、こんどは大きい飛行になる。サンフランシスコまでの長かったこと、四時間以上かかった。空港で予約してあったレンタカーを借りる。電話で予約確認してあった車と準備してあった

車が違い、車種は違うわ、料金は違うわで、交渉に時間がかかったが、結局、最初は一日ごとに百ドルといわれていたのが四十ドルで落ち着いた。Hはそばで息子達のやりとりを眺めていた。

今回の小旅行の目的地であるヨセミテ国立公園とセコイア国立公園に向かう。まず、ヨセミテ国立公園へ。持ち込んだGPSを駆使して、二人は米国のどこの道路でも走る。サンフランシスコからの高速道路はデイトンの周辺と雰囲気の違い、特に郊外に出ると、岡や畑やそこに風力発電や牛や、なんとなくほっとする風景が広がっていた。息子が車に持ち込んだGPSはどんな田舎の細い道を通っても「xx通りです」などとしゃべっていた。ヨセミテ公園入り口に三時半過ぎに着いた。ヨセミテ公園は翌二十八日も訪れたが、ここでのことはすべて割愛、ジャイアントセコイアに急ぐ。

十一月二十九日、前夜泊まったのはモーターであったが日本の狭いビジネスホテルより遙かに快適だった。モーターからセコイア国立公園までは三十分くらい。坂道を登って入り口で二十ドルの入場料を払う。つづら折りの坂道をどんどん登り、ジャイアントセコイアのある森に入る。

車道の両側に強大なセコイアが何本も現れる。太さといい、高さといい、尋常でない。ここには地球上で最大の巨木と言われている「シャーマン將軍の木」がある。ネットの記事によると、高さ八十四メートル、幹回り三十一メートル、地面の位置での最大直径が十一メートルとある。新幹線の車両の長さが二十五メートルだから、この木の異常さが知れようというものである。「シャーマン將軍トレイ

ル」が始まるところが車の駐車場であった。ここから歩いて世界最大の木を見に行く。

駐車場から下って木に近づく。トレイルの両側には巨大な木が立ち並んでいる。ここは今は公園なのでこの先に目的の木があるのが分かって歩いているが、初めて目にした人はどれほど驚いたことか。シャーマン將軍の木の周りには柵があり木本体に触ることはできなかった。

今回の小旅行の一番の目的は、巨木をくり貫いた車が通れるトンネルを見に行くことだが、息子達の車に乗せてもらった移動だったので、そのトンネルがセコイア公園の中だったのかそこから出たあとからだったのか定かでない（ネットで検索してもよく分からなかった）。ともかく見た！倒れた巨木をくり貫いて車が通れるようになっていた。記念撮影をした。目にしたものは古い記憶のそれと同じだった。このような木のトンネルは大きな風で壊れることもあると書いてある記事もあったので、子どもの頃父に買ってもらった本の中にあつたのと全く同じものを見たのか確かめることはできないが、ともかく念願が叶った。本で見たものを小学校低学年のときから六十年以上経ってこの目で見る事ができた。亡くなった父親の二倍以上の年齢になったが、四十歳前の若い父は変わらず父親である。

